

106 今水寺の沈鐘 (八名郡)

八名村大字八名井吉祥山の今水寺舊趾の一部と思はれる處、今は谷間の沼田に今水寺の學頭泉龍院の鐘が沈んでゐると傳へられる所があり、その場所は稻を植ゑず、雜草のしげるにまかせてある。ある時村人があたりの田で働いてゐると、氣味の悪い唸り聲と共にこの場所へ地底から大鐘が浮び上り、暫くして又地底深く沈んで行つたといふ。

107 今水寺の舊趾 (八名郡)

八名村大字八名井地内の吉祥山の中腹、今水寺の舊趾附近に本名を三ツ木澤と呼び、俗に地獄澤と呼ばれてゐる所がある。今水寺は弘法大師の開基と稱し、盛だつた時は寺坊十二、寺領一萬石にも及んでゐたといふが、天正元年武田信玄野田城攻撃の時、この今水寺に陣を布かんとしたが、僧は暴兵に靈地を汚されるを恐れて聞かなかつたので、信玄の怒にふれ、寺を焼き、一山の寺僧を盡にした。ために三ツ木澤には三日三晩血潮が川となつて流れた。それからこの地を地獄澤と呼ぶやうになつた。

尙この寺趾に黄金數百枚が埋められてあると傳へられてゐるが、それは、兵火を恐れて某和尚が埋めたものといひ「朝日さす夕日輝く青木の根」といふ謎のやうな詞がのこつてゐる。

一五、馬鹿噺、切支丹噺、其他

三六六

1 うそこき新左 (北設樂郡)

下津具村で炭焼竈を初めて作ったといふ新左はうそをつくことが大へんうまかつた。話し出す時は必ず「さあ一つはいけんしようか」から始まり「おれも本當のことは知らぬが」と前置をした。話の途中で聞き手が笑ふと話をやめたが、そのくせ話がすむと自分ではゲラゲラ笑つた。その話は鐵砲の自慢話が多いくせに、新左自身鐵砲はから下手だつたといふ。その自慢話を二つ三つ。

- 一、大勢で追ひ出した猪を射つ時俺が山の中腹で鐵砲をかまへた。猪はほつから谷へ、いんにや、ほつから俺の方へまつしぐら、何かころがるやうに早く来る。猪の「三枚下」をねらつてズドンと一發やつたがはづれた。すぐに二發目を射たら確に手ごたへがあつた。が猪の姿が見えぬ。さておかしと思つてよく見たら、勢あまつた猪は谷をつき越へ向ふの山の草刈場の二才(坪木)の上にはゆつと突き上つたまゝ死んでけつかつた。其うちに獵師が大勢きて、此有様を見て「こゝつあ新左にかぎる」といつた。

(猪の三枚下は鐵砲の弾が通らぬ所だといふ)。

二、鐵砲を箆の中に打込んだらどうだい、弾があちこちにはねかへつて、ひんがらひがら(終日)パチパチパチ鳴つてゐた。

三、俺が鹿を追ひ出したら、鹿が川の中へ逃げこんだ。仕方なしに俺も川に飛込んで追つかけたら、鹿は川を越えて向ふの岡へかけ上る。そこで俺が追付いて、すぐ鹿の尻尾へとりついた。鹿があがく。俺は尻尾をつかまへて放さぬ。そのうちに川岸にあつた山芋を鹿が足であがき出した。俺もたうたう鹿に引づられて岡に上つたが、俺のたづけが馬鹿に重くなつたので見たらたづけの中にはさごう(雜魚)が一ぱい入つてゐた。こんなをかしいことはない。

四、屋根の棟に曲の手に雀がすすなりに並んで止つて居たから、鐵砲をぐいと曲げてこつちの方のこぐちからねらつて打つた。そしたら並んだ雀をたつた一發で皆打取つてしまつた。

五、俺が若い時に芋を作つたよ。それはでつかいやつが出来た。おれのはさなるは三尋半あるが、ふじづるのやうなつるが、そのはさなるを七卷半まいてゐた。何とでつかいと思つて掘つて見た。鉄じや掘れんで、てこで掘つたよ。一工半かかつた。何皆でどの位あつたつて。それは大へんだ。そゝだらひに三杯半あつた。こんなことも珍らしい。

2 新八つあの算盤 (北設楽郡)

三輪村大字奈根字深谷の笹谷某の祖父は新八といつて算盤の名人だつたさうな。住居は猪の落し穴のやうな、追込み場のやうな所の粗末な小屋に住んで居たさうである。ある年ふと家出をしたが、四年程してから村のある人が善光寺へ参詣したところ、新八に似た人が居るので、恥をかいても一度だと決めて「あんたは三河の新八つあちやあないかのう」と尋ねたら、「ハアさうだ。あんたばそんなら三河の衆かね」といふことになり、新八を村に連れもどしたといふ。そのやうに一度家出すると三年、四年と歸らず旅をしてゐるうちに、西國、四國、秩父、奥州と殆んど日本中を廻つたといふ。その間に得意の算盤で巾をきかせ、何處へ行つても指南をして來たといふ事である。算盤の達者な人でもびた錢一文を二萬に割るのはむづかしいさうだが、新八はそれをもつと二萬以上に細く割ることを五六通り知つてゐたさうで、算笥の引き出しの鍵も算盤でパチパチはちいてあけたさうで、その時分村人は日本一の上手といつてゐたと傳へられてゐる。

3 切支丹傳説 (一宮市)

尾北地方では徳川初期切支丹布教について左の如き言ひ傳へがある。

病人がある家へ布教者が來て何氣ない話をして歸りに隣村迄行つて來るからと一寸風呂敷包を預けて行く。但し此の中を見て貰つてはならぬ、絶対中を見て下さるな、と云うて預けて行く。然るに二日たつても三日経つても取りに來ぬ故、不審を起して、見るなと云へば見たいもので、そつと開いて見ると、重箱の中に小さい人形がはいつてゐる。そのまゝ包んで置くと、その翌日頃先の人が來て、「永らく有難う、包を頂いて行きます。但し中を見ては下さりはしないでせうね。」と云ふから、「いや見ません。」と云ふと、其の人は風呂敷包を開いて中の人形を取出し、人形に向かつて、「當家の人はお前を見たか、見なかつたか。」といふと、其の人形は、「見た〜」といふので、「そら御覽なさい。嘘を云つても人形がよく知つてゐます。」と云つて、それから切支丹へ引込むと云ひ傳へられてゐる。

尾州北方代官所で寛文年中に捕へられた切支丹宗徒は、笠松柳原で處刑されたが、役人が首を切るとその首が鼠と化して木へ登つて行つたら、大鷲が飛んで來てその鼠を掴みとつて大空高く舞上つて姿を消したといふ。

帷子七郷(岐阜縣可兒郡春里村)東ねのの大名主の娘は、素晴らしい美人で、しかも切支丹の張本であつた。最後に丹羽郡繼鹿尾觀音の座禪岩へ捕手數十名の爲に追ひつめられたが、切支丹の魔法で眞先に進む捕方の頭をばたりと眠らせて、大勢のひるむ隙に一枚の木の葉を大木曾川へ投げ入れてそれに乗つて下へくと流れて行つた。大方外國へでも行つたのだらうと云ふ。

4 大目小目 (知多郡)

昔、三和村の石瀬へ神様がおいでになるといふので村人が出迎へて拜むと、その神様は大目小目であつた。それ以來石瀬で生れる子供は誰も大目小目の子ばかりであつた。それで神様がおあはれみになつて今ではあまり判らない様にして下さつたのだといふ。

5 編地 (豊橋市)

田町(現湊町)の往來二十歩程の間が、月夜には堅縮のやうに見えたさうだが、寛延二年の火事からこのことがなくなつたといふ。

6 正月十四日十五日に年を取る家 (北設楽郡)

武節村大字小田木では昔土地の若者が戦争に行き、正月十四日に歸つた家では十四日に年をとる、十五日に歸つた家では十五日に年をとると、今でもその家々ではその日が來ぬと年をとらぬといふ。

7 村境を定めた話 (北設楽郡)

本郷町大字本郷三ツ瀬と奈根の村境を決めることになつたが議論がまちまちで定まらない。そこで日取を決めて、同日同時に兩村の庄屋が自分の村から出かけて、出合つた所を村境にする事になつた。當日が來て三ツ瀬の庄屋は出遅れたため、遂に奈根の村は大きく、三ツ瀬は山奥に小さくなつたといふ。

8 村境をきめた話 (北設楽郡)

園村大字足込と別所村とは村境の争があつたが、兩庄屋は談合の結果お互に日を期して早朝村

を出て二人が出合つた所を村境にすることにした。その日足込の庄屋は牛に乗り、別所の庄屋は馬に乗つて来て、出會つた所が今の村境であるといふ。

昭和十二年一月二十日印刷
昭和十二年一月二十五日發行
愛知縣教育會
定價一圓八十錢

著作 愛知縣教育會
古代表者 伊奈森太郎

編輯 東京市小石川區五十二番地
發行所 岡村千秋

印刷所 東京市京橋區區西五丁目二番地
望月清矣

發行所 東京市小石川區
五十二番地
郷土研究社
東京三三九一七番

725
8

